
光と闇の恋

冬空 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇の恋

【Nコード】

N4562D

【作者名】

冬空 奏

【あらすじ】

どたばたコメディの恋愛小説笑いあり笑いあり涙・・・あり？の小説気軽にどうぞ

第1話（前書き）

警告*

恋愛系が苦手な方にはあまりオススメできません。

恋愛よりちとコメディが多いのであらかじめご了承ください

伝わりにくいです

以下の条件が大丈夫これぐらい平気と思う方はどうぞお読み下さい*

第1話

第1話

「別れの時」

「話ってなんなのブラ？」

「つれない目でブラを見るフィ

「実はな・・・」

下を向きながら言う

「俺と別れてほしいんだ！」

迫力をつけながら言う

「!?!」

言葉が出ないフィ

「最後の時なんだ」

歯ぎしりしながら言うブラ

「え？ちょ・・・」

言葉が出ないフィ

「もうお別れなんだ・・・」

「え・・・うん」

2人黙りながら一夜が過ぎそつな時

「もうすぐ夜が明ける・・・」

「え・・・でも・・・」

黙りながら小声で言う

「言うなッ！」

大声でブラが言う

スッ

ブラはかまえた

「ブラ、何する気？」

首をひねりながら言う

「キヤア！」

何故叫んだかそれはブラが抱きついて来たのだ

「これでお別れだ・・・」

親子みたいな一面だった・・・

「ブラ・・・／＼」

こうして一夜が過ぎて2人は別れた

そして自分の家に戻った

第2話に続く・・・

第1話（後書き）

読んで下さり有難うございます

面白かったですでしょうか？

他の小説もありますんで読んで下さると誠に嬉しいです

第2話「のほほんとした生活」

「闇の家」

「ZZZZZZ」

ブラが寝ている。

「ブラさん早く起きてください！朝食ですよ！」

それは友人のルカの声だった

「んあ・うるさいな〜後5分〜」

小学生の様な声で言う

「何言ってるんですか！そんな事言ってる5時間寝てるじゃないですか！」

むちゃくちゃにブラを振り回すルカ

「はいはい」

眠そうな顔でブラが言う

「朝食だぞ〜」

エルが言う

「え、マジ!？」

一気に目が覚めた様な受け応えをする

「ああ、マジ」

そうエルが言うとすっとんでブラが来た

「たく、飯の話になるとこれかよ」

飽きたようにエルが言う

「あ、お前眼鏡なんかかけてたか？」

不思議そうにブラが言う

「いつも、かけてるっての」

飽きた受け応えで言う

「それはともかくエプロンはお前に似合っな
知れた様な顔でブラが言う

「そうか？」

首をひねって言う

「ま、早く食べ冷めるだろ」

真剣に言う

「お前よめいらずだな」

笑いながらブラは言う

「ま、確かにな」

へえ〜と言うような顔で言う

「早く食・え！」

顔を除きこむ様に言う

「はいはい」

〜1時間後〜

「ごちそうさん」

「ご馳走様」

2人で言う

「あ、ちょ」

追いかける様にエルが言う

「食器ぐらい片付けろよな」

呆れ顔で言う

一方2階でわ

「戦国BASARA2でもやるか」

喜び顔で言う

「私にもやらしてくださいよ」

ルカが言う

「お前の方が上手いな」

笑いながら言う

此処で第2話終了

第3話へ続く・・・

気候な旅の用意（前書き）

（ ＊ ＊ 警告 ＊ ＊ ）

コメディーです

恋系かと思つて松尾バシヨンボリした方は1話をご覧下さい
此処からかなり旅まで引つ張ります

早くして欲しい方は感想にそう欠いてください

気休な旅の用意

第3話

「気休な旅人」

「たく、食器ぐらい片付けてくれよな」

エルが1人洗っている

2階でわ

「元親、行けくたえろ！」

ブラの音が部屋中に響き渡る

「どうしたんですか？」

漫画を置いてルカが言う

「必死に行け！元親！」

響く声は下まで届く

下でわ

「うるさいなあいつ何やってんだ？」

疑問に思いながら食器を洗うエル

「ピンポーン」

「は〜いどちら様で？」

インター近くにいくエル

「ラテイです」

聞こえた時ビックリしたエル

「どうぞ」

開け様とした瞬間前に開けられた

「おじゃましま〜す」

ラテイが入る

「あれ？誰も居ないのかな？」

疑問に思いながら探す

「エル君〜エル君〜」

探していた時小声が聞こえた

「は〜い」

「エル君!？」

それはドアに挟まれたエルの声だった

「開けるなら言ってくださいよラティさん〜イテテ」
痛みを我慢しながら言うエル

「ごめんねエル君所で」

首をひねりながら言う

「なんでエプロンなんだい？」

「あ、ヤベ」

「早く着替えて下さいエル君の裸なんか見たくないです」

「あ、はい」

(あいかわらずきついなラティさん)

と言いながら着替えてきた

「で話はなんだい？」

首をかしげて言う

「いやーまーちょっとね^^;」

初心になりながら言う

「教えてくれよ〜!」

困り顔で言う

「いや〜兄つていいもんだなーと」

頭を欠きながら言う

「そうなんですか？」

自分も兄だが会う事がないのでそういう答えを出す

「ちょっと想像してご覧よ」

笑いながらいう

「ましてみますか」

頬杖を付きながら想像する

「お兄ちゃ〜ん!」

その声はエルの想像で現実のエルの妹の声である

「フツツ・・・ノノノ」

エルらしくない想像だ

「確かにそうですね」

笑いながら頷く

「でしょ〜!」

そう言う妹話が始まった

一体女子寮光の家はどうしているのか・

第3話終了第4話へ続く

3話THE・・・END・・・

気候な旅の用意（後書き）

此処までこんな小説を読んでいただき有難う御座います

まだまだ書く気なので少々アイデアにてこずると思しますので少々お待ち下さい

所ですが

ブラの姉とフィの兄を誰にするかアンケートを取ります

感想を書いて送って下さい

あの日あの時(前書き)

今回はギャグ的&ちょっとカオスです

1話との違いはどんだけ〜！です

今回はちよつと変態が出現します

前ネタばれにしちゃってます

文字がいままでのより妙に長いです

以下がOKなかたはどうぞ

あの日あの時

「おおっともう夕方か・・・」

ブラが空を見上げて言う

「そうですね」

笑いながらルカが言う

「おいブラ〜！」

エルが下から上がってくる

「ん？なんだ？」

暗い目をして言う

「約束の時間だぞ」

ニタリと笑って言う

「そうだったな」

喋りたくなさそうな目で言う

「え〜となんだったけな〜」

思い出すような顔つきで言う

「お前がなんでフィちゃんに恋をしたかの話だ」

聞きたそうな目つきで言う

「えーと確かな・・・」

話す目つきで言う

「* 此処からはさつきとちよつと違います*」

「もうブラ早く起きて！」

そこに居るのはブラの姉ミロだった

「姉ちゃん今日なんかあった？」

それはブラの口調じゃなさそうなブラだ

「だから！昨日から言ってるじゃん！」

怒りながら言う

「なんかあった？」

そんな会話が続き大混乱だ

「だからダブルデートする約束でしょ？」
追い詰めて言う

「そ、そ、そうだったな」

ビビりながら言うブラを手名づけられる貴重な存在のミロだ

「*+一方ファイ家では+*」

「お兄ちゃん起きてよ〜！」

それはファイの声だった

「ん？今日なんか有ったか？」

それはバク。ファイの姉だ

「今日ダブルデーする約束でしょ？」

ファイが怒るように言う

「ああそうだったな電話で場所を聞くか」

そして電話をかける

「はい？もしもし？」

それはミロの声だ

「おう俺だ」

そういう風に言う

「アッ！バク君どうしたの？」

ビックリして言う

「待ち合わせ場所どこだった？」

うる覚えの用な目で言う

「えーとねーポケカフェだよ」

可愛い口調で言う

「分かったんじゃカフェで合おうな」

そういつて電話を切った

「あの可愛いミロに会うのは楽しみだ〜」

テレながら言う

「ねえお兄ちゃんミロさんの弟って格好いいの？」

ファイが言う

「学校ではモテる方らしいよ。冷静な奴だけだ」

そう言って準備をする

(冷静かゝ好みのタイプだなゝ ちよつと楽しみ)

そう心の中で思う

「なゝファイ？」

遠くから声が聞こえる

「何？お兄ちゃん？」

言い返す

「こっちのジャンバーとこっちとどっちがいいと思う？」

それは黒のジャンバーと白のジャンバーだ

「黒かな私的には」

そうして準備が進む

「私も準備しようつと」

やる気になっていう

「お兄ちゃん見ないでよ！」

笑いながら言う

「おう！」

勢い良く言う

(見たかったなゝ^^;))

ちよつとエロいのがタマに傷な兄だ

あの日あの時（後書き）

此処までお読み頂きまことに有難うございます
次週をお楽しみに！

今回恋愛系と期待した方まことに申し訳ございません

ネタがなくて・・・^^；

恋愛ネタを追及しているのにな～^^；

何か本当にすみません

恋愛系を楽しみにしてる方早くしろ！と感想にお書き下さい
他の感想もどうぞ

本当に恋愛なのか！？と思っただ方

確かにコメディです^^；

第5話：店でパニック！（前書き）

今回もコメディイです！！

前話とはまた違う話と言っことで・・・

ま、どうぞッ

第5話：店でパニック！

第5話

「過去に浸る未来」

「まあ後カクカクシカジカでな」

ブラの話は終わった

「おおいルカ、ブラ」

エルは二人を呼んだ

「ん？なんだ？」

ブラは反応した

「外食でもしないか？」

エルはそう答えた

「お前免許持ってたか？」

ブラはそう言い返した

「おう持ってるぞ」

そう言い返した

「んじゃ行くわルカも行くか・・・ん？ルカ！」

大声で言う

「ど、どうした!？」

真剣に取り込むエル

「んにゃ寝てる」

ブラはそう答えた

ズコーン！！と言うエルの扱けたオトが聞こえた

「そうか・・・あいつと俺徹夜だからな」

体勢をとりなおして言う

「ほう俺に内緒で何やってんだ？」

怒りをこらえて言う

「ま、まあちよつとな」

焦りながら言う

「とりあえずルカは俺が入れから行くか？」

「そうときたら行きますよ」

そして行く事を決めたが問題があった

「どうやってこいつを持つんだ？」

「お姫様抱っこで・・・」

焦りながら言うエル

「おうそうか」

そして車の中に入れた

（ - 1時間30分後 - ）

「おし、ついたな」

そういつて店の中に入る

「ルカは起きてるか？」

エルはブラにそう問う

「んあ先ほど起こした」

「ハハハ・・・」

ブラの後ろからルカが降りた

「どう起こされたんだ？ルカさんよ？」

笑いながら覗き込んでいう

「実はですね・・・」

それは付く1時間前の事だった

（*+1時間前+*）

「・・・お・・・お・・・」

「・・・おきた・・・」

「おお、起きた、起きた」

笑いながらルカの顔を覗き込んで言う

「ちよっ・・・何故笑いながら？」

怯えながらルカは言う

「いい寝顔見せて貰いましたよルカさん・・・プッ」

最後に笑いを入れながら言う

「ブラさん酷いですうう！！」

かああっ顔が赤くなり、その後ブラを全力で泣きながら叩く
「痛いって、やめろ！やめろ！」

必死で笑いながら防ぐ

でも一番それを気にしているのは、ブラでもルカでもない。そうエルだ

（やけに後ろが騒がしいなあ・・・何があったのやら）
と口には出さず心の中でつくづく思うエルであった

‘*’ 此处で現実に戻る*’*’

「ま、と言う訳です」

^^;の様な顔で言う

「やはりブラは酷いな・・・」

笑いながら言う

「昔からこんな感じだ。俺は」

笑いながら言う

「ま、とりあえず店に入るぞ」

呆れ顔で言う

店に入るとどうやらこの時間帯女子高生が多いみたいだ

ブラ達が店に入ると

「キヤーー！！」「キヤーー！」

と言う声上がる様だ

「うるさいなー」

とブラとエルは言うがルカは

「こんばんは〜」

と笑顔で言うタイプである

「で、メニュー何にすんだ？」

ブラとルカに問いかける

「じゃ、俺はハンバーガーとポテトとコーヒーで頼む」

とブラはエルに頼む

「あ、私は自分で頼みます」

と自分の財布をパチッと開ける

「いいのに・・・ルカは優しいなあ」

と笑いながらブラの分もかって座るエル

「そういえばだが・・・」

ブラが二人に言う

「ん？なんだ」

「何でしょうか？」

二人とも応答する

「俺ってあんまり人気ないよなあ・・・ハア・・・」

ため息をつきながらハンバーガーの袋を開ける

「そそそそんなはずねえだろ！！」

焦ってエルが言う

「でも・・・いろいろと人気あるよなルカって・・・」

と二人で言う

「そんな事ありませんよッ！」

ちよつと焦って言う

「食べ終わったし帰るか」

ブラが机に腕を置いて言う

第4話 THE・・・END

5話へご期待ッ！

第5話：店でパニック！（後書き）

今回も此処までお付き合い頂き有難う御座います

また次週もお付き合い願います

此処で次週の展開はッ！？

物語はしつかりと笑いありにッ！？

涙もあるかもッ！？

蘇るあの頃を・・・(前書き)

めっきりタイトルパクリですよね・・・はい
えーと、今回は、片付けから、一気に違うストーリーへ!?
ま、その所よろしくお願いします
連載続けますよッ!

蘇るあの頃を・・・

第6話

「まあ帰ったのは良いが・・・これはなんだ・・・」

何も言う気が無い感じで言う

「片付けに入るぞ・・・」

ため息をついて言う

「おっしや！！やるぞ！！」

気合を入れて皆で言う

*：^^^*45分後*：^^^*

「おお〜い」

ブラが下に勢い良く下りてくる

「なんだ？そんなに慌てて？」

「どうしたんですか？」

疑問に思うエルとルカ

「これを見てくれッ！」

ハア・・・ハア・・・と息切れして言う

「お！これはッ！」

そう。エルが驚いたのも意外ではない。ブラはアルバムを持ってきたのだ

「暇だし皆で見ようかな」と

笑いながら言う

「後でだぞ！」

人差し指を立てながら言うエル

「おう！」

ブラが承知すると言う珍しい事があった

^^^さらに58分後^^^

「よし終わり！」

笑いながらエルが言う

「ブラ〜アルバムを開くぞ〜」

叫んで言うエル

「おう開くか」

もう近くまで来ていた

「早いな・・・」

エルには言葉が出なかった

「懐かしいな〜この写真！」

笑いながらエルが言う

その写真は体育大会のリレーのブラの走ってる写真だ

「あの頃はよかつたな〜・・・」

^^その頃に遡る^^

「くそツ追いつけねえ・・・」

それはブラの声だ

「がんばれ〜!!!」「いけ〜!!!いけ〜!!!」

高学年から低学年までもが応援してくれた

(1年だって俺を期待してるんだ・・・この勝負だけに・・・負けられ

ない!!!)

そう心の中で思い全速力で走る

しかし相手の速さは予想以上で勝てる相手ではなかった

残念ながら2位だったがまだいいだろう、とブラは今も考えている・

@@現代に戻る@@

「そんな事もあつたな〜・・・」

エルはそう言ってページをめくる

「そういえばこの写真誰がとったんだ？」

疑問に思うブラ

「私が写真を撮った主ですよアルバムの違つのもありますけど」

ルカがしっかりと答える

「そうだったのか・・・」

納得したような顔で言う

「ん？この写真は？」

ブラが高校時代のルカの写真を見つけた

「ああ、これですか」

ルカも気づいて言う

「何故この写真がツ؟؟？」

疑問に思うブラ

「俺が張つといたのさルカの写真はなかなか無いだろう？」

エルが出てきて言う

「そうか！ルカは新聞部だった時なかなか誰もいらないうって言うからお前の写真載せて注目を集めたんだつたな。それで、一番人気があつた写真だな」

長い間説明をしたブラ、どうやら言ったとおりの様だ

「＊＊＊時代は高校に遡る＊＊＊」

「・・・という訳でルカツツ！」

誰かは分からないが部長の様だ

「は、はいっなんですか？」

勢い良く応答する

「なかなか新聞は売れないのでお前の写真を載せるツ！いいなツ！
勢いが凄いのがこの部長の暑い所

「はい！でも何処で撮影しろと？」

疑問を投げつけるルカ

「このCDのサシの様に写せばいい。仲間の協力もとれよ」

そのCDは知っている人は知ってる、そこに空があるから。だ

「はい！分かりました」

ルカはそう答えた

（＊放課後の夕方＊）

「よし！実行するぞ」

これはルカの先輩だ

「はい！でも、どうやって涙を？」

飽きれながら言う

「え」と・・・まあ（以下略）」

と説明をして実行開始したのである

く*、今に戻る*、く

「まあ、大変だっただろうな・・・俺陸上部だったからしらが」
もちろん新聞部は此処に一人もいないと言っ感じで言う

「ま、とりあえず今日は寝ません？もう夜中の3時ですよ？」

欠伸を堪えて言う

「じゃ、寝るか」

皆解散をした

第6話THE・・・END

蘇るあの頃を・・・（後書き）

此処までこんな小説を読んで頂き有難うございます

一応、これからもお付き合います

それなりに文字間違い多いですけど・・・

感動は1ヶ月に一回(前書き)

どもー、更新遅れ人間です

いつになれば終わるんだと思う方多いですよー

というかもう小説じゃなくて漫(それは禁句だろう

まあ笑ってもらえれば嬉しいです

つか絵下手だから小説なんですが・

感動は1ヶ月に一回

第7話

「映画に浸って笑って感動」

「そういえば、ブラって映画とか見ないよな」

エルが真剣そうな顔で言う

「別に興味ないしな」

ブラが面倒くさそうに言う

「まあ、映画鑑賞もいいですね」

ルカも笑いながら言う

「TUTAYAでも行って映画のDVD借りたらどうだ？」

エルが少し焦った様子で言う

「面倒だな・・・行く気ねえ」

スプーンをぶら下げてつまらなそうに言う

「エルさん！こういうのはどうでしょうか？ちょっと耳を貸して下さい」

何かひらめいた様にルカが言う

「ん？・・・ほう・・・よし・・・」

何か企み顔になって聞く

「な・・・なんだ？」

焦って言うブラ

「行かなかつたら、1日全裸な」

エルが少し笑って言う

「よ、よせ！行くからそれだけはよせ！..」

焦って言うブラ

「じゃあ行け」

エルが普通に言う

「分かった・・・かつたるいけど行くか・・・おい！ルカも来いよ」
後ろを向いてルカに指を指すブラ

「何故私が！？まあ、分かりました行きましょーう」
そうして2人でTUTAYAに行った

~~~~~+\*69分後\*+~~~~~

「おせえな・・・」

煎茶をのんで言うエル

「ただいま」

ブラがドアを開けて言う

「おう、何借りて来たんだ？」

疑問を抱くエル

「タイタニック」

普通に言うブラ

「ほう・・・あれは泣くぞ・・・」

笑いながら言うエル

「いや・・・ルカがいい映画だと言うから」

ルカを指指して言うブラ

「とりあえず部屋で見えてきたらどうだ？」

真顔で言うエル

「おう・・・俺を泣かせれるか？」

笑って言う

「さあな」

溜め息をついて言うエル

~~~~~+\*2時間後+\*~~~~~

「そろそろ見に行くか」

思いついた様に言うエル

「ですね」

笑って言うルカ

「ブ・・・ブラ!？」

驚いた程に叫ぶエル

「うう・・・」

エルの足にしがみつくブラ

「はなせ！！気色悪い」

そう言つて足を振つて追い払うエル

「逃げるぞ！ルカ！」

真剣な顔をして言うエル

「分かりました！」

真剣になつて言うルカ

＊くそして20分後＊く

「逆効果だったな・・・」

「はい・・・」

2人で溜め息をついて言う

「しばらく、気晴らしにウノでもするか？」

「ええ・・・」

そうしてウノを何分かした・・・

「ウノ！」

大声でエルが叫ぶ

「あまいですね・・・ククク・・・4ドロー！」

武藤遊　の様に言う

「畜生！これいつになつたら終わるんだ？」

少し憎む様な顔つきで言う

「もう大丈夫か？あいつ？」

いつもの様な目つきでルカを見る

「行きます？」

そうして答えるように言う

「怖いけど・・・頑張るか！」

笑つて言う

「それに、早く終わらせないと話が進まないの・・・」

考えながら言う

く2階く

「おう、大丈夫かくブラく」

適当に言う

「おう！何か用か？」

笑って言う

「戻りましたね・・・」

「ああ、・・・うん・・・」

息づまりながらいう

「あん？どうした？」

普通の対応で言う

第7話END

感動は1ヶ月に一回(後書き)

今回もしっかり読んで頂き有難う御座います

最終話本当にいつなのだろう・・・

もはや、自分でもわかんねえ・・・

浴槽の罖（前書き）

読者の方に注意です

*これはある意味だんだん漫画になってきております

*小説らしくないかもしれませんが

*小説らしさなら1話が最終話にご期待下さい

なお【は小声を表します

浴槽の罾

第8話

「二人だけの話」

「ただいまー」

ブラが帰ってきた

『おかえり』

『おかえりなさい』

二人供椅子に座って小声で言う

「どうしたの？」

『あ、いやちよつと・・・な』

ブラの返事を小声で返すエル

「何かあったのか？」

『実は・・・』

暗い目つきで言う

「何？」

息を呑んで言う

「いやまあ、風呂入る順番きめてただけだ」

笑いながら言う

「ああ・・・それだけ？」

厭きれた感じで言う

「で・・・2対1で入るわけだ」

「ジャンケンできめとけ」

「うむ、そうしよう」

【最初は~~~~!!!!】

【グ~~~~!!!!!!!!!!】

「ジャンケンホイ!!」

「えつとなー、俺とブラがパー、ルカがチヨキか・・・
真顔で言う」

「じゃあ、ずっと俺等は二人でルカ一人か・・・」
笑いながら言う

+~夜20時~*'+?」

「お風呂あがりましたよ」

笑いながらいう

「そうか、では入るか」

真剣な目つきで言うエル

「俺は、まあ除外で」

ゲームをしながらいうブラ

「お前も早く来い」

シャツの後ろを持ってひきずるエル

「ぐええ〜!!首がじまる〜やべでぐれー」

必死に抵抗するブラ

「まあなんだかんだ言ってる着いたな」

「ああ・・・うん」

笑いながら言うエルと泣きながら言うブラ

浴槽

「まあ、なんだかんだ言ってる気持ちいいんだけどな」

ボケーとしながら言うブラ

「ZZZ・・・」

寝ているエル

「で・・・エル・・・ん?どうしたー?」

寝ていることに気づかないブラ

「・・・何?」

眠そうに言うエル

「どっちから・・・洗う?」

「お前からでいいよ」

即答するエル

「わかった」

風呂からあがる

「そういえばだが、ルカってあいつ細いよな」

疑問に言うブラ

「俺にはお前でも十分細いが」

ボケーとしながら言うエル

「そうかあ？」

「うん、そう」

即答するエル

「まあ、どうでもいいけどな」

笑いながら言う

「ではそろそろあがろうかなあ、エル」

「・・・・・・エル？」

疑問に思うブラ

「あいつ・・・のびたな・・・」

少し笑って言う

「まあ、ほらっっておこう」

「・・・無視するなよ・・・」

浴槽から小さな声が聞こえてくる

「早く気づけよ!!!」

勢いをつけてブラに突進する

「いてっ!!!」

勢い良く倒れるブラ

「何すんだよ!!!」

「まあまあ、落ち着いてください」

止めに入るルカ

「あ？うん、御免」

落ち着くブラとエル

「そんな事してるうちにもう、探偵ナ トスクープ始まりましたよ」

「え？マジで!?!もうそんな時間か」

「はい」

「じゃあ、そろそろ寝るか」
話を終えて上に行くブラ

~~~~~ブラが寝たころ~~~~~

「今日もお疲れ様です」

「いやいや、そちらもお疲れ」

笑いながら言う

「いや〜しかしあいつがいないと静かだろうな」

「そうですね」

笑いながら言う

「あいつ金間に合ってるか？ルカ」

「全く間に合ってません」

やれやれな顔で言う

「じゃあ、足しとこうか」

「そうですね」

笑って言う

「じゃあ取り合えず寝るか」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

第8話

終

浴槽の罨（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます
やっぱり漫画っぽいと思われ
ます
応援して下さいる方はいませんか
ね
はい、有難うございました

雪、無音（前書き）

今回はなんとも切羽詰った状況の癖に新キャラ・
まあ、お楽しみ下さい！

雪、無音

第9話

「新キャラ登場」

「おはよー」

「おはようございます」

エルとルカで笑いながら挨拶をしあう

「すまん、朝食はまだだが・・いいか？」

「全然OKです」

「そうか」

笑いながら話をかわすのだった

「あ、そういえば」

「どうしたルカ？」

疑問に思うエル

「今日、こつちに弟が来るんです」

笑いながら言うルカ

「へえ、ルカに似てイケメンかなあ」

笑いながら言うエル

「そんな事言わないで下さいよ！恥ずかしいじゃないですか」

照れながら言うルカ

「あはは、ごめんごめん」

笑いながら謝るエル

「とりあえず朝食できたぞ」

「いただきます」

『 ＊ ＊ ＊ 30分後 ＊ ＊ ＊ 』

「 〽 馳走様 」

と言って、手をあわせた

「 さてと、片付けかな 」

と言ってエルは皿を持って行った

「 早くこないかねえ、ルカの弟さん 」

手遊びをしながら言うエル

「 お皿はいいんですかたまってますよ 」

と言ってルカはためいきを一つついた

「 ああ、ちゃんとやるよあれ位 」

と言ってエルは、皿を洗い始めた

「 もうすぐ来るころなんですがね ・ ・ 」

「 へえー楽しみだねえー 」

ちよつと笑って言うエル

プルルルル ・ ・ ・

「 ああ、ちよつと待っててくださいね 」

と言ってルカは、電話をとった

「 はいもしもし。 」

『 ＊ ＊ ＊ 12分後 ＊ ＊ ＊ 』

「 誰から？ 」

「 弟からです 」

笑って言うルカ

「 なんて言ってた？ 」

そうエルが言ったらルカが即答した

「 ちよつと遅くなると 」

笑って言うルカ

「 ちよつと残念だねえ〜 」

笑って言うエル

「 そついえば何歳なんだ弟さん 」

「 えーと12です 」

エルの問題に笑って答えるルカ

「可愛いもんだねえ」

その時だった

ピンポン

「お、噂をすれば」

「はい、どうぞ」

と言ってルカがドアを開ける

「失礼します・・・」

そう言っただけに入ってきた

「えーと、これが弟さんかい？随分可愛いねえ」

そう言っただけエルは笑って、ルカの弟の頭を撫でた

「どうも・・・」

そう言っただけルカの弟は笑っていた

「えーと、これが私の弟のユキです。宜しくお願ひします」

「宜しくお願ひします・・・」

二人で笑いながら言う

「えーと、俺はエルって言う者だ。そこんどこ宜しく」

笑いながら自己紹介するエル

「所でユキ君よ。なんでユキって言う名前なんだい？」

「実は拾い子なんです」

真剣な顔つきで言うルカ

「えっと、ですね。大雪が降った日がありました」

「うん・・・」

息を飲んで聞くエル

雪、無音（後書き）

ここまで読んで頂き有難うございます

決して長とかパクってないですからね・

決して・・決して・・

うんパクッテナイ

雪2（前書き）

注意

恋愛小説なんて・・・前だけです裏はま（待て

とりあえず表を見たい方は第1話をどうぞ

後は・・・ま（だから待て

感想、評価、アドバイスを頂くと私、無限が禁断症状を起こします

ついでに読む時脳内でアニメを想像するのがいいと思います

では・・・どうぞ

雪2

第10話

「銀世界」

「それですね・・・」
真剣な目でルカは言った

「@@此処からはルカの話です@@」
「冬はさむいなあ。」

雪が降る中で歩くルカ

「ああ、寒っ。早く帰ろう」

震えながら言った

「・・・おや？」

「何処だ・・・此処・・・」

雪の中一人道に迷ったルカ

「・・・ん？」

下を見たルカ

「誰か倒れて・・・小さな子供だ・・・大丈夫？」

そう言つてルカは、凍死しかけの小さな子供の体をゆすつた

「うわぁ・・・凄い冷たい・・・」

そう言つてルカは小さな子供を抱きかかえて走つた

「大丈夫？寒くない？」

心配そうに言うルカ

「・・・丈夫・・・」

小さな子供が返答した

「そっか。君名前はなんていうの？」

少し笑つてルカが言う

「・・・無い・・・」

凍えながら子供は返答した

「そうか・・・一緒に来る？」

笑ってルカは言った

子供は黙ってうなずいた

「ただいま」

「おかえり」

ルカの兄は即答した

「ん？どうした？お腹膨れてるけど・・・」

「気、気のせいですよ・・・」

「ちよつと見せてみる・・・」

疑い深い兄はルカの服を脱がせた

「ん？これは誰だ？」

「とりあえず・・・服着させてください。」

・・・・・・ 10分後* * * *

「えつとですね・・・道で凍死しかけてたので・・・このまま弟としよ
うかと・・・」

冷や汗を掻きながら言った

「へえ・・・俺弟はもう正直御免なんだが・・・」

その時、ルカの抱いていた子供が涙目でルカの兄の方を見た

「うつ！・・・そんな眼差しで見られても・・・」

そう言っても子供は悪意の無い眼差しで見る

「分かったよ・・・うちの子におなり！」

そう言つてルカの兄は子供に抱きついた

「まずは・・・名前を決めないか？無いんだろっ？名前？」

「ああ、はい」

子供を抱きながらルカの兄は言った

「そうだな・・・アキとか・・・」

真剣に考えながら言う

「それ女子系だと思います」

「そうか・・・んじゃあ、リュウとか」

「それあなたの名前じゃないですか」

リュウが発言する度に突っ込むル力だった

『 30分後++++』

「じゃあ・ユキって言う名前に決定だな」

「よしよし、お前は今日から瑠架ユキだ」

頭を撫でながら言うリュウだった

『 現実』

「と言う訳です」

「あなたの血は通ってないのかルカ・」

頭を掻きながら言うエル

「じゃあ、弟も加わって宜しく願います」

「ん、わかった」

T H E

E N D . . .

雪2（後書き）

此処まで読んで頂き有難うございます（ペコリ

なんか妄想しながら確認すると弟っていいなーと思ったり・

まあ、そんな事は忘れて・

実は・ルカは初めてのタメ口です

知らない人多いと思うので念の為報告を・

まあ・主人公今回出てないですよね・会話の中でしか

まあ、もう少しすると・サスペンスタ的な方向に行かせるつも（ないない

まあ、最終話まで長々とお付き合いさせて頂きます

これからも宜しく願います

頭脳と腕力（前書き）

今回は張り切りました

えつとですね・・・はい・・・コメディです

コメディすぎる番組です

いえ・・・小説です

ネタは・・・あまり考えておりません

頭脳と腕力

第11話

「格闘」

「流石に最近体重が増えてきました・・・」

「そうか・・・スポーツでも習うか？」

少し笑いながら話す

「そうだな・・・格闘タイプだし・・・それにあったものをやったら？」
「例えばなんですか？」

「え〜と、テコンドー、剣道、柔道、空手、ボクシング、キックボクシングと色々あるな。」

長々と話すエルだった

「本でも買って決めますか・・・」

そう言つて二人は本屋に出かけた

「よし！決めたぞ！」

そう言つてエルはルカの耳もとで呟いた

「はい！分かりました」

そう言つて二人は柔道教室へ行つた

~~~~~40分後~~~~~

「瓦割りもきついねえ〜なあ、ルカ」

「・・・ルカ？」

瓦を割りながら言つたエル

「そうですね？余りきつくはないですよ。今、50枚目です」  
笑いながら言つたルカだった



「良くそこまで割れたねえ俺は37枚が精一杯だよ・・・」

「『『 実戦\* 』』」

「ルカはがんばるねえ〜もうこれで79人目だよ・・・」

「『『 35分後 』』」

「いや〜疲れましたね^^」

「お前凄いな・・・」

啞然とするエルと笑うルカ

「お前、リーグとか目指せば・・・」

「そうですね」

「『『 翌朝 』』」

「ルカがいないな・・・何だこのメモ？」

ルカを探している时机の上にあつたメモを見つけた

「えつと何々、ほう。にしてもあいつ達筆だな・・・」

「・・・とか言ってる場合じゃない！あいつ何処行つた？」

「『『 『ルカの方では』』』」

「はい！終了です」

「終わりましたか」

「『『 『家の方では』』』」

「遅いなあいつ・・・」

「ただいまです」

「お！やつとかえつてきたか」

「はい！つらいですね^^・漢検1級」

「え・・・君準一級だったの・・・」

「はい」

「『『 『1時間後』』』」

「受かると言いね」

エルはルカに向けて優しく行つた

「そうですね」

笑つて言い返した

そして漢検の合格通知がくるのは5カ月後だった

「~~~~5ヵ月後~~~~」

「届きましたね」

笑って言うルカ

「うん。じゃあ封筒を開けるか」

その中に入っていたのは・・・合格か・・・それとも不合格か!?

11話END・・・

12話にご期待・・・

## 頭脳と腕力（後書き）

此処まで読んで頂き有難うございませ  
頑張りましたよ・・・

ネタはあんまり無いです  
もう・・・ネタ無い

ゲストさんが来るまで（予告？）（前書き）

どうも、無限です

なんと！嬉しいこと！うちの小説にも、ゲストさんが！  
嬉しいです

## ゲストさんが来るまで（予告？）

### 第12話

「ゲストが来るまでの準備」

「えっと、そういえばうちの方にゲストが来るんだよね？」

「はい、そうです」

確かめてから二人は家具屋のLikeyaについた

「うむ、やはり色々あるんだな」

棚を眺めて言うエル

「早めに買う物だけでも買いましょう」

と言つてルカは、二階へ行った

「えっと、何買うんだい？ルカ君」

「そうですね・・・えっと」

そして、考えながら歩いて行った

「まずは、椅子ですね」

そういうとルカは、違うコーナーに行った

「あ・・・ちよ・・・待ってくれ」

「ソファーコーナー」

「もう、此処出ない？」

「何故ですか？」

「あの人大富豪の息子だし・・・高級すぎてもあれだし・・・このまま座布団とコタツで・・・」

「そうですね」

\*\*\*1時間後\*\*\*

「やっと帰ってきたな」

「はい。やっぱり座布団とコタツです」

笑つて二人は言った

「さてと、テレビでも見るか」

そう言っただけは、リモコンでテレビの電源を付けた

「そうですね・・・」

「やる事ないね・・・本当に・・・」

あきれた顔で言う

「あんた・・・作者じゃねえの!? 何故此処に・・・」

「いいじゃん暇だったし・・・」

驚いた様に言うエルに即答で答える無限（作者）

「そうなのか、まあ、いいんだけどな・・・」

驚きながらも平常心を取り戻すエルだった

「ん？ああ～おはよう」

今、ブラが起きてきた

「おせえよ！お前もうちよつと早く起きろ」

「そうですね！少しぐらい早く起きても」

「まあ、そんな事良いからお茶かなんか・・・」

「ん？あ、はいお茶。いやー、ブラも大変だね^^;」

「うん俺も大変だよ・・・作者はいいね・・・って作者!?!」

〓〓〓1時間後〓〓〓

来るんだ」

「ゲストが

「そうですね^^」

沈黙が続いた後にやっと話になった

「にしても、どうしたの？この部屋見たこと無いけど」

「ゲストさんの為、部屋を用意していました」

笑いながら言うルカ

「所でそのゲストは誰なんだ？」

首を傾げて言うブラ

「えっと、バクフーン達の冒険のラグラージさんです」

笑って言うル力だった

12話・・・THE・・・END

ゲストさんが来るまで（予告？）（後書き）

此処まで読んで頂き有難うございます  
結構気合を入れて書こうと思います



## 人格と作者（前書き）

今回は私も登場と言っこと  
えっと、今回は書いてる間眠くなつたのでテキトーです

## 人格と作者

### 第13話

「遂にゲストさんの登場」

「もうすぐ……ですかね？」

「さあね？楽しみなのかな？ルカは？」

笑いながら言うエルだった

トウルルルルルル……

「おおい、ルカ電話が鳴ってるぞ」

「はいもしもし。あ、はい。はい分かりました。はい」

「何の電話？」

「ゲストさんからです」

「一日遅れて来るそうです」

「そうか……今日はゆっくりするか……」

くっくっく10分後くっくく

「ようし、飯でも食いに行くか」

「そうですね」

笑って言う2人だった

「ルカ、欲しいのは俺が買おうか？」

「大丈夫です。自分で買いますよ」

「……グスン」

「どうしたんですか！エルさん！？」

「いやー、お前は人に頼らず生きてて偉いなあと思って……」

「ブラの野郎はすぐ俺に頼むからな……」

「と言うかエルさん！皆さんに凄く見られていますけど」

「えっ……？」

その目線はしばらくエルに夢に出てきたようだ……  
「やつと買いましたね……」

「うん。そうだな……」

少しテンションダウンしながら席に着いた2人だった

「あれ？君達も来てたの？」

「あ……お前は……作者!？」

そこで二人がみたのは作者だった……

「こんな所で食事しないで、早く更新しろよ……」

「偶にはいいじゃないか」

エルの言葉にすぐに反論した作者だった

「……家……」

「ただいま……散々な目にあつたな……」

「そうですね」

玄関に座り込んで話す2人

「ああ、君達今帰つたんだ？遅かつたね」

「そうか……？作者も帰り遅かつただろ」

「まあね」

「……てか作者!？」

「今頃気づいたんですか？エルさん」

そんなこんなでこういう話が玄関先で続いた

「さてと、作者いつから俺等のうちに居たんだ？」

「前の話の時から、天井裏に住んでるよ」

「マジかよ!？」

「……14分後……」

「所でユキは？」

「えっとね。一緒に天井裏に住んでるよ」

普通に言う作者だった

「そうか……分かつた」

「所で、漢検の知らせ来てるけど……」

「ああ、これね」

「じゃあ、開封するか」

「〓〓〓開封後〓〓〓」

「良かったなルカ！一級合格だったぞ」

笑ってルカの肩を叩いたエルだった

「痛いです！」

肩に乗った手を払ったルカだった

「まあ、そうケチケチしなさんな」

作者が笑って言った

「いい加減にしろい！！」

ルカの違う人格が出てきた

「あ、しまった・・・これも設定のうちで・・・」

作者も作者で慌てた

「じゃあ、私はこれで、さいなら〜」

作者は屋根裏に逃げた

「うわ・・・あの野郎にげやがった」

「もたもたすんじゃねえ！」

「ぎゃあああああああ！！！」

その響きは月まで響いたと言う・・・

第13話THE・・・END

## 人格と作者（後書き）

ルカの第二人格は凄く怖かったかもしれませんが；  
ルカは大人しいイメージだったので

ゲストが来た（前編）（前書き）

えっと、今回バクフーンさんの小説のポケモンがゲストとして出演  
します

今回こそ！と言っわけでござ

## ゲストが来た（前編）

### 第14話

「ゲストさんがやって来る」

「今日来るんだな」

「楽しみですね^^所でその怪我どうしたんです？」

自分のやった事なのに分からないので首を傾げて聞くルカだった

「ん？ああ色々あったんだ・・・」

苦笑いしながら言うエル

「いつ来てくれるんでしょうね？」

笑いながら言うルカ

「さあ？もうすぐ来るんじゃない？」

「じゃあ、用意しないと^^」

笑いながら話す2人だった

「そうだな・・・と言うか用意しなくては！急ぐぞルカ」

「はい！」

勢いをつけて用意をさせた2人だった

＝（1時間後）＝

「やっと用意を完了した・・・」

「ですね」

汗をかきながら言う二人だった

「縁側でししおどしの音でも聞いて茶でも飲みましょう」

「そうだね」

そうして二人は和室に向かった

「ふう〜やつぱり落ち着くな〜」

「そうですね。体が暖かい・・・」

「そうだね」

「……てかまた出てきたよ作者!？」

「まあまあいいじゃない」

「( )(2時間後)( )」

「もうすぐ来るんじゃない?」

あてずっぽで言った作者

その時だった……

ピンポン

「あ、はいどうぞ」

「おじゃまします」

「あ、マジで来ちゃった……」

何たらかんたら言ってゲストさんが来た

「えっと、今回ゲスト出演と言う事で「バクフーン達の冒険」から来たラグラージです」

長々と話すラグラージだった

「宜しく、私はこの作者です。天井裏に住んでいます」

「私は知っての通りルカです」

「俺は、嫁入らずのエルだ。宜しく」

一人終わったらまた一人のテンポで自己紹介していく3人だった

「宜しく願います」

丁寧に礼までしてくれたラグラージだった

「所でラグラージさんお腹へったろ?今から作るから待っててくれ」

笑いながら腰に手を当てて言うエル

「有難うございます」

笑いながら言うラグラージだった

%%##30分後\$##%

「おうし、できたぞ」

そう言つてエルは机に料理を置いた

「今日は何かな」と

作者は上機嫌で言った

「おお!今日はシチューか」



笑いながら言う作者

「いただきます」

皆で綺麗にハモった

#####

「ご馳走様」

今回も綺麗にハモった

「ラグラージさん大丈夫だよ！皿は俺が全部持って行くよ」

笑ってまかしとけと言う様に言ったエル

「有難うございます」

頭を下げて言うラグラージ

「いいよいよ」

笑って言うエルだった

「所で、あっちの小説では、どういう立場なの？」

作者がラグラージに向けて言った

「そうですね・・・ほぼ空気です・・・」

ちょっと落ち込みつつ言うラグラージだった

「だ、大丈夫ですよ！！きっと今から目だって行きますよ！！」

ルカが焦りながらいった

「そうかな・・・有難うルカさんのおかげで少し勇気が出たよ」

笑って言うラグラージ

「そういえば、もう12時回ったな・・・」

作者が時計を見て言った

「じゃあ、寝ようか」

「おやすみ〜」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

最後まで綺麗にハモらなかった

14話THE・END

ゲストが来た（前編）（後書き）

ラグラージさんをしばらくお借りしております^^；  
ゲストと言うのは初めてなので凄く緊張しております  
ではっ

ゲストが来た（中編）（前書き）

今回は中編です

多量の汗をかきつつ書いた物です  
ではっ

## ゲストが来た（中編）

### 第15話

「ゲストさんが来た」

「フア〜・・・おはようございます・・・」

大欠伸をしようルカ

「おう！おはよう」

笑って答えるエル

「エルさんは、いつも早いですね・・・疲れないんですか？」

疑問に思い聞くルカ

「今は、頑張らないと駄目だろ？ゲストさんも来てるし」

「そうですね。そろそろ気合いれとか無いと・・・」

「おはよ〜。」

「作者さんですか？おはようございます」

「君たちは早いねえ・・・」

眠そうに言う作者

「そうですね？今はもう朝6時じゃないですか」

笑って答えるルカ

「そうかあ・・・所でゲストさんは？」

「まだ、寝てます」

お茶をすすりながら言うルカ

「そっか・・・にしても可愛い寝顔だねえ（笑）」

少し笑って言う作者

「ブラさんじゃないんですから^^；でも、可愛いのは認めます」  
案外真剣に答えるルカ

「もうすぐ、朝飯できるからな〜・・・」

「ああ、有難うございます」

笑って答えるルカ

「ふあゝ・・・おはよう・・・ハッ（汗）」

「いいんだよ・・・タメ口で^^;」

焦りながら言うエル

%% % 10分後 % % %

「頂きます」

皆でいつせいに言う

「そういえば・・・何でいきなりタメ口に？」

「えっと、あつちだと、親友が多いから・・・」

焦りながら言うラグラージ

「そっか・・・そりゃあ、そうなるな・・・」

「そうだよ、あつちの小説読んでみたら？」

「そうしようか・・・」

焦りながら言うエル

「そういえば・・・居心地とか悪くない？」

真顔でエルはそう言った

「大丈夫」

「そうか・・・ならいいんだけどな」

汗をかきながらも笑って答えるエル

「そんな話してるうちに冷めてますけど・・・私と作者さん食べ終

わりましたよ」

「おつといけない^^;」

焦りながら食べるエル

#\$ % 10分後 # % \$

（右に侵入者が居る！左に侵入者が居る！後ろに侵入者がいる！）

「なんだよ・・・いきなり」

耳を塞ぎながら言うエル

「すみません・・・ヘビィギアしてました」

笑いながら言うルカ

「まあいいけど……ラグラージ君背筋ゾクゾクしてるぞ……」

その言葉にえっ、と思う変わりにラグラージの方を向いた

「あああ!! す……すみません」

凄く焦って言うルカ

「だ……大丈夫だよ……」

少し涙ぐんでいうラグラージ

「ご……御免なさい!!」

「まあ、そんな堅苦しい事はやめなさい」

そこにいきなり作者が割り込んだ

「そうですね……」

「そ……そうだね」

そして二人供冷静になった

、(、50分後)、(、)

「今日はどうする?」

「どこかに行きます?」

「おっ!! いい考えだ!!」

笑って言う

「あの〜」

「どうしました?ラグラージさん?」

普通に戻って言うルカ

「ずっとブラさんに会ってないんだけど……」

汗をかきながら言うラグラージ

「あれは……放っというて茶でも飲む?」

そう言うてエルはラグラージに茶を渡した

15話THE……END

ゲストが来た（中編）（後書き）

中々頑張っております^^;

前回から本気をだしております

限界を突破します

**ゲストが来た（後編）（前書き）**

注：今回は少しドラマチック？な表現があります  
コメデイです

ポケ崩壊はくれぐれも我慢して下さい  
メタルギアの内容は全く知りません  
知ってるセリフとか入れ込んだだけです  
では  
それでもOKならどうぞ



## ゲストが来た(後編)

### 第16話

「予定は未定」

(俺のリロードは、レボリユーションだ!!)

「また、ヘビィギアやつてるのか・・・」

エルはため息を一つついた

「御免なラグラージさんあの人ゲーム好きなんだよ・・・」  
呆れた目つきで言うエル

「いやあ、いいよ全然。僕もゲームは好きだし」

「そうか・・・所でモンハン持つてるか？」

真剣な目つきで言うエル

「持つてるけど・・・」

「そうか！分かった。手始めにハンターランク上げるか！」

笑って言うエル

「所でハンターランクは・・・」

「まだ、1・・・」

「そうか！分かった！よし、皆を呼んで普通に1を越そう」

＃\$%2時間後#%\$

「よし・・・ついにG級だ・・・」

「あ、有難う・・・」

少々疲れたエル達だった

「よし！ヤマツカミでもやるか！」

笑って言うエル

「ええ！？何・・・それ・・・」

「えーと、クラゲ」

考えながら言うエル

「ク・・・クラゲ・・・」

###30分後###

「よっしゃ！クエストクリア！」

「有難う！」

笑ってラグラージはそう言った

（彼女は逝ってしまった・・・）

「何か深刻だよ・・・ヘビィギアの内容^^」

（でも、死は敗北ではない）

「うわあ、深刻だよ・・・ギア・・・」

「ふああ、おはよう」

「あ、やっとなきたかブラ」

「ん？この見慣れない人は誰だ？ルカの弟子か？」

「違う違う。ゲストさん」

%&&10分後%&&

「へえ・・・所でルカは？」

首を傾げて聞くブラ

「ヘビィギアしてるけど・・・」

（まだだ！ターゲット！まだ終わってない！）

「な？」

「本当だ・・・大分進んでるな・・・」

二人でため息をついて言う

「にしても・・・お前よく2日も寝てたな・・・」

「ん？俺内緒で出掛けてたけど・・・」

真顔で言うブラ

「え・・・そうなの」

その時だった

ピンポン・・・

「あ、はい」

エルが急いで玄関まで行く

「いやあ、久しぶり」

「久しぶりです」

そこにいたのはラティとアキだった

「いやあ、久しぶりですね。アキさんも久しぶり」

笑って言うエル

「ん？誰ですか？」

へビイギアを中断して玄関まで行くルカ

「あれは・・・誰ですか？」

「ん？ああ、ゲストのラグラージさん」

「へえ・・・」

そうラティが言った瞬間だった

「あの・・・アキさん・・・僕だって・・・一応・男です・・・」

「もう少しこのままでいさせてください」

「・・・」

「えっと、まあ、放つといて話を続けようか・・・」

”#\$10分後”#\$

「まだ、やってますけど・・・」

「えっとね・・・アキはね・・・いい人を見つけるとすぐ抱きつくクセがあるんだよ・・・」

「そうなんですか・・・まあ、いい人だとは思いますが現にあれば・・・」

二人で一緒に溜息をついた

「あの・・・そろそろ離して下さい・・・」

「はい」

「ア・・・やっと離れた・・・」

\$\$\$\$10分後\$\$\$\$

「まあ、あれは照れるよな・・・」

「いきなりだからさ・・・」

そう言って二人は溜息をついた

16話THE END



ゲストが来た（後編）（後書き）

えっと、今回は頑張ってみました

スネークタートルです

ではっ

次回も宜しくお願いします

ついでにラグラージさんは、「バクフィン達の冒険」からの、ゲストです^^

## ゲストが来た（完結編）

### 第17話

「今日で、ラグラージ君とはお別れだな・・・  
少し寂しそうに言うエル

「そうですね・・・あ、バレた・・・」  
へびイギアをしながら言うルカ

「へびイギアを中断しろ！」

そうエルが言ったら命令通り中断した

「今から、マンティスだったんですよ・・・」

「知らん」

###10分後###

「今日帰っちゃうんですか・・・」

「寂しいね」

ルカの後に作者が続いて言う

「ラグラージ君あの時はびっくりしただろう？」

「そうだね・・・アキさん積極的すぎるよ・・・」

二人は少し笑って言う

「私は何もされないから楽ですけどね」

笑ってルカは言う

「お前、友達俺ら以外以内だろ？」

「そ、そんな事は無いですよ」

「誰が居るの？」

「えーと、まずリユーさん、マツキーさん……」

「結構居るね……しかも中国人系多い……」

##\$%&20分後%\$#&

「よし、今日が最後なら、銭湯にでも行こうか!」

笑ってエルが言う

「僕はいいけど……ルカさんはいいの？」

笑って言うラグラージ

「全然大丈夫です」

\$%&%\$銭湯\$%&、

「よし、入るか！」

「基本狭い銭湯ですけど……」

「ああ、大丈夫だよ」

焦りながら言うラグラージ

「さて、サウナでも入るか」

「そうですね」

\$%&30分後\$%&

「僕ちよつと暑いから出るね^^;」

だるだるになつていうラグラージ

「うむ!わかった」

エルは了承した

##\$%30分後\$#\$

「いや〜気持ち良かったですね」

「ちよつとそこの兄ちゃん金くれ!」

「いやです」

「でないとかいつがどうなるかな」

「あ!ラグラージさん」

「神速……」

そう言つてルカはヤクザの後ろに回つた

「瓦割り……」

そう言つてルカはヤクザを気絶させた

「さあ！今のうちににげましよう！」

%家%

「酷い目に会つたな．．御免なラグラージさん」

「あ、いえ大丈夫だよ」

「もう帰らないと．．．」

「そうか．．．じゃあ、最後に俺の願い聞いてくれるかい？」

「はい！」

「うん分かつた君に俺のひざを膝枕にして寝て欲しいんだ．．．  
顔を赤らめて言うエル

「ああ、はい別にいいですよ」

笑つて言うラグラージ

そう言つてエルの膝の上に頭をのせた

エルの膝はほんのり暖かかった

そう、子供の頃の間感覚だった。

\$%&10分後\$#%

「じゃあな！」

エルは笑顔ながら言う

「さようなら」

ルカが笑つて言う

「さようなら」

そう言つてラグラージは帰つた

「ん？目に埃が．．．」

ラグラージが帰つた瞬間エルの目に少量の水が浮かんだ

「私も目に埃が．．．」

ルカも同じく目に少量の水が浮かんだ

「さて、俺らも家に入るか．．．」

「ですね．．．」



17話 THE . . . END

ゲスト編

完結

ゲストが来た（完結編）（後書き）

最後の方は流石になあ、と思っ  
てまじめに書きました  
結構疲れております  
精神的に・・・

Mr Zはあまりカンケーない名前(前書き)

今回は私らしくないバトルシーンです

なおも、うわぁ、ズタなどと思わないで下さい^^;

では・・・どうぞ

Mr Zはあまりカンケーない名前

第18話

「そういえば、最近ユキ君の姿を見ないね」  
何かを思い出した様にエルが言う

「おはよ」。屋根裏にこんな落ちたよ・・・」  
眠そうに作者が言う

「何だこれ？」  
その内容とは!?

「えっと、何々、瑠華新一へ・・・青い坊主は、私が誘拐した。  
返して欲しければ貴様一人で、私の居場所へ来い。地図は裏側に記  
載した

謎の男 Mr Zより・・・だって」

「ルカの本名長いな・・・まあ、私が決めただけど・・・」  
笑いながら言う作者

「おはようございます・・・」

「う・・・、やばい・・・、ちょっと買い物行って来る!!」  
「ごめん!今日は、約束がっ!!」

焦って外に出る二人

「行ってらっしゃい・・・何ですか?これ」  
ルカが一枚の紙に気づいた様だ

「貴様!!!Zの野郎!!!断じて許さん!!!」  
ルカの目が一気に赤くなり、不思議な赤いオーラが出た

%%外%%

「逃げて正解だった・・・」

多量の汗をかきながら言うエル

「ああ・・・怖いな・・・あいつ」

同じく汗をかく作者

%%\$#一方、ルカは・・・

「えっと、此处ですかね・・・」

地図どおりに来たルカ。そこには、大きな倉庫があった

「失礼しまーす」

そう言つてルカは重たい倉庫のドアを開けた

「よう、待ってたぞ」

そこには、ユキと謎の男が居た

「早くユキを・・・!!」

焦りながら言うルカ

「ん？あいつなら麻酔銃で眠らせたぜ・・・」

笑いながら言う謎の男

「面白れえ・・・あなたは、あの弟さんをそんなに大事に思ってるん

だね・・・」

少し笑つて言う謎の男

「ついでだが、俺の名前はクラーケン・・・俺の名前をお前は、知っ

ているはずだ・・・」

椅子から、立つて言うクラーケン

「あ・・・貴方は・・・ど、同期の・・・クラーケンさん!？」

凄くビククリした様に言うルカ

「そうだ・・・では、話に戻る・・・あなたの弟をかけて、決闘だ・・・

」

「あんたが勝てば俺は、こいつを解放しよう・・・あんたが負ければ、

こいつの命はない」

笑つて言うクラーケン

「それでも、受けるか？」

「ええ・・・受けますとも・・・」

%& ' 決戦場' & \$

「じゃあ、やるぞ・・・GO・・・」

そう言つてクラケーンは動き始めた

「・・・神速・・・」

「おうつと・・・お前の動きは全て読んでいる・・・」

笑つて言うクラケーン

「・・・うかな・・・」

「ああ？何ていった？」

「・・・そうかな・・・」

そう言つてルカはクラケーンの後ろに回り背中に瓦割りを決めた

「くっ・・・やるねえ・・・俺の血が騒ぐねえ・・・」

「・・・神速・・・火炎放射・・・」

「くっ!?!?・・・ユキの為ならこんなもの・・・」

「ほう・・・やるね」

笑つて言うクラケーン

「・・・自分の身が滅ぼうが・・・傷が深手になろうが・・・関係ねえ・・・」

「俺はユキの為に・・・こんな事をするだけだ・・・」

目を光らせて言うルカ

「へえ・・・その本気とやら、見せてもらおうじゃないの・・・」

少し笑つて言うクラケーン

「ユキ!! 待つてる!!」

恐ろしい目つきで言うルカ

「神速! 電光石火! 波動弾! インファイト!!」

恐ろしい速さで全ての技を決める

「かはっ!・・・やるねえ・・・こつちも本気で行かせて頂こう・・・」

「火炎放射! 瓦割り! 切り裂く!」

クラケーンも負けじと、凄いスピードの技を繰り出す

「うおおおお!!」

「はあああああああ！！！！」

二人はすれ違った

「く・・・くはっ！？やるねえ・・・ルカさん今度やる時は・・・絶対・・・負け・・・ねえよ」

そう言い残してクラーケンは倒れた

「ユキは何処だ！！」

そう言つてルカはユキを搜索する

「ユ・・・ユキ・・・」

搜索していたら、倉庫の中のコンテナを背もたれにして、寝てるユキが居た

「よ・・・良かった・・・無事だったか・・・かはっ！！まだ傷がうずくぜ・・・」

胸を押さえながら言うルカ

この傷はクラーケンの切り裂くの時つけられた、傷だった

「さあ、ユキ帰るぞ・・・」

そう言つてルカは、ユキを肩車して倉庫を後にした

＃％家＃％\$

「ただいまです^^いや、遅くなってすみません」

笑つてルカが言う

「おかえり^^大変だったでしょう・・・凄い傷だしね^^」

笑いながら汗をかいて言うエル

「ルカお兄ちゃん・・・」

照れながら言うユキ

「何かな？」

笑つて言うルカ

「子供の日だね・・・」

少し顔を赤らめて言うユキ

「そうだね・・・何か買つてあげようか^^」

笑つて言うルカ

そうして、この家は笑顔につつまれた

ルカも、この傷がだんだん治つてく気がした  
そう、体の傷と、癒せぬ心の傷を・・・  
18話THE・・・END



Mr Zはあまりカンケーない名前（後書き）

ついで、ですが・・・

クラークンはバクフーンです

バクの次にもう一匹いるのです^^；

クラークンの事については、本編でまた解説する予定です  
ルカの同期です

ちよっと、ベタだったかも知れませんが

ついでに、ルカは格好良くかいてみました

ついでに、作者はもう、ヘトヘトです

## カオスワールド（前書き）

今回は、あの宿敵がやってきます

そして・・・

ルカ「そして・・・」

次の悪役のキャラ募集をしたいと思います  
詳しい事はこの短い小説を読んだ後で^^

## カオスワールド

### 第19話

「この小説は、名前が長い奴は最高5字」

「今日も何もする事が無いな・・・」  
暇そうにエルが言う

「そうですか？」

へビィギアをしながらルカは言う

「こう・・・何か・・・驚く様な事はないのか・・・」

溜息を一つついてエルは言った

その時だった

ズドーン!!!

「おい!・・・な、なんだ!？」

椅子から落ちててもエルは驚き続けた

「此処が・・・ルカ・・・の・・・家か？」

聞き覚えのある声だ

「クラーケンさん・・・ですか？」

驚きを隠せないルカ

「うむ・・・所のだが・・・同居させてもらっても良いか？」

笑ってクラーケンは言った

「まあ、いいけど・・・」

#\$30分後( )

「なんでいきなり、私達の家には？」

ルカは、驚きながら言った

「うむ・・・組織から脱退していい所が、無かったのだ・・・」  
寂しそうに言うクラーケン

「組織？じゃあ、前ユキをさらったのも？」

真剣な顔つきで言うルカ

「命令だ・・・組織は・・・お前達を狙っている・・・  
クラーケンはルカの質問に答えた

「そうなんですか・・・」

ちよつと、落ち込んで言うルカ

「お前の並外れた強さなら、大丈夫だろう・・・  
クラーケンはルカを褒める様に言った

「そういえば・・・どんな名前の組織ですか？」

またしても、質問するルカ

「あの組織の名前か・・・「KW」だ・・・」

真剣に答えるクラーケン

「KW・・・略さずに言う・・・？」

またしても、質問するルカ

「注文が多いな・・・カオスワールドだ・・・」

溜息を一つついて言うクラーケン

「その・・・カオスワールドやらと、戦闘をさせていただきまし  
よう！」

19話THE END・・・

## カオスワールド（後書き）

さて、説明をさせて頂きます

一人何回でもOKですよー

実は、組織を作ったものの・・・悪役を考えていないのです^^；  
計算違いな訳です^^；

投稿してもらった中から、作者がいいのを10人位決めます^^  
投稿が、一つもない場合、更新をストップして考えます

読者の皆様、ご協力お願いします

ちなみに、評価ではなく、感想でできるだけお願いします  
評価でもOKですけど・・・

ゲストさんが来た（予告？編）（前書き）

第2弾です

今回はもう一人加わりました

とりあえず、どうぞ

## ゲストさんが来た(予告?編)

### 第20話

「そういえば、今回もまたゲストさんが来るみたいだな・・・」  
笑ってエルは言う

「とりあえず、食材でも買って来ます」

そう言っただけルカは椅子から立ち上がった

「%&商店街%\$&」

「これで、終わりですかね・・・」

荷物を持って言うルカ

「ちよつと、バクフーン！大分方角が違うきが・・・」

聞き覚えのある声だ

「いや、正解のはずだ！この道でいける！」

自信を持って一人のポケモンが居た

「あれって・・・すみません！ラグラージさんですか？」

その二人に声をかけるルカ

「ん？誰ですか？あれ？ルカさんじゃないか！」

肩を叩いてラグラージは言った

「これが、お前の言っただルカって奴か？」

首をかしげてもう一人のポケモンの方が言った

「俺は、バクフーンだ。丁度そっちに行こうと思っただんだ。」

自己紹介をして、笑って言うバクフーン

「じゃあ、今からご案内します」

#%&20分後#%\$

「此処がそうなのか・・・」

見上げながらバクフーンが言った

「ちよつと前より広くなつてない？」

首を傾げてラグラージは言った

「拡張しました」

笑って言うルカ

「まあ、とりあえず中に入ろう」

そう言つてバクフーンはラグラージの手を引っ張つて玄関に向かう

「痛い！子供じゃないんだから！」

叫びながら言うラグラージ

#”！家の中！！！！

「おかえり〜！そして、こんにちは〜ゆっくりしていつてくれ！」

笑って言うエル

「じゃあ、そうさして頂くぞ」

笑って言うバクフーン

「さて〜、バトルバトル！！」

来ていきなり言うバクフーン

ドカーン！！

「ぬおっ!?!」

ビククリする二人

「その挑戦受けて立とう・・・」

煙の中からクラーケンが歩いて出てくる

「面白そうな奴が出てきたな！では、やるつか！」

笑って言うバクフーン

「では、俺等は見物といくか・・・」

そう言つてエルは皆を道場に案内する

&%’道場’&%

「よおし！始めようか・・・GO！」



そう言ってエルは見物に入った

「・・・神速・・・」

先に行ったのは、クラーケンだ

「うおい!?・・・怖い奴だなあ・・・」

そう言ってバクフーンは神速をよけた

「じゃあ、次は俺か・・・捨て身タツクル!」

そう言って凄い勢いでバクフーンが突進してきた

「危ないねえ・・・まあ、そういう奴は嫌いじゃない・・・」

少し笑って言うクラーケン

「・・・神速」

もう一回凄いスピードで動くクラーケン

「同じ手は通用しないぜ・・・」

笑って言うバクフーン

「切り裂く!」

そう言ってクラーケンはバクフーンの後ろで切りかかる

「うぐっ!?やるなあ、でも、それだけじゃあ、俺を倒せないぜ!」

笑って言うバクフーン

「火炎車アアア!!!」

そう言ってクラーケンにタツクルをした

「かはっ!?お前、DEATHより強いんじゃないか?」

笑って言うクラーケン

20話THE END

ゲストさんが来た(予告?編) (後書き)

こんな感じでがんばっていきたいと思います  
とりあえず、バクフーンさんの、ポケモンの魅力出せたかなあ・・・  
凄く不安です^^;

ゲストさんが来た（前編）（前書き）

今回もゲスト編です  
では、どうぞ

## ゲストさんが来た(前編)

### 第21話

「強い奴だねえ……あんたは……」

笑って言うクラーケン

「お前もな！」

笑って言うバクフーン

「瓦割り……」

クラーケンは、バクフーンの背後に回る

「なッ!？」

クラーケンは、瓦割りが当たったが、それは人形だった

「残念でした〜本物はこつちだ！」

そう言ってバクフーンはクラーケンの頭上から攻める

「破壊光線！」

そう言ってバクフーンは光線を拡散させる

「ぐわあああ!!!」

クラーケンは叫んだ

「俺の負けの……様だ……しばらく……休憩させて貰おう……」

……

そう言ってクラーケンはよれよれになりながら二階に上がった

「ようし!俺の勝ちだ！」

笑ってバクフーンは言った

「凄い人だねえ……」

息を呑んで言うエル

「一応、トーナメント形式だからなあ〜」

笑って言うエル

「次は、まあ、ルカとラグラージ君だね」

「凄い、負ける気がするんだけど・・・」

最初から、弱気のラグラージだ

「んじゃ、いくよ、GO!」

そうエルが言った

「・・・神速・・・」

最初は全くクラーケンと同じだ

「同じ手は通用しないよ」

そう言っつてラグラージは神速を軽々とかわす

「・・・影分身・・・影分身・・・」

そう言っつてルカは100近くの分身を出す

「へっ!?!」

驚きを隠せないラグラージ

「波動弾!」

そう言っつて分身とルカは一気に波動弾を繰り出す

「痛ッ!ど・・・どれだけ飛び散ってるの!?!」

波動弾がラグラージの体にあたった

「まだまだですよ・・・悪の波動!」

波動を一気に出すルカ

「うおい!?!怖いなあ・・・」

なんとかよけるラグラージ

「こっちもやらないとね・・・」

「ハイドロポンプ!」

そう言っつてラグラージは大量の水を放出した

「ぐわっ!?!」

ルカの分身は一気に消えた

「とりあえず、第一関門は突破したかな・・・」

少し笑っつて言うラグラージ

「インファイト!」

「カウンター!」

ルカのインファイトを軽々受け止めるラグラージ

「そろそろ・・・私も本気で！・・・覚醒技・・・崩壊すること  
鬼神の如し！」

そう言つてルカは一気に力を増大させる

「うってイメージが変わつただけど・・・」

息を呑むラグラージ

「波動弾！！」

巨大な波動弾を出すルカ

「痛いなあ・・・さっきより威力が上がってるし・・・」

傷を押さえながら言うラグラージ

「ハイドロカノン！」

ラグラージは凄い勢いの水を出す

「ぐわああ！！」

水圧に押しつぶされそうになるルカ

「ハア・・・ハア・・・じゃあ、これがファイナルラウンドですね・

・・・」

恐らく、どちらとも強力な技を決められると倒れる様子だ

「神速・・・神速・・・神速」

神速を何回もするルカ

「け・・・煙が・・・」

煙のせいで視界が見えないラグラージ

「・・・」

ルカは無言で背後に回る

「とどめ・・・」

そう言つて波動弾を決める

「僕の負け・・・だね・・・僕も・・・クラーケンさん・・・と同様・・・

休憩を・・・」

クラーケンと同じくよれよれで歩くラグラージ

「すみません・・・しばらく休ませて・・・」

そうルカが言つたとたんルカが倒れた

「バクフーン君、悪いけどこいつを休憩室まで連れてってこない

？」

「で、でもルカリオって体のわりに重いんだろ？」

少し嫌がるバクフーン

「大丈夫、大丈夫、こいつ標準より大分軽いから・・・」

笑って言うエル

「そうなのか？・・・ルカリオの標準が54Kgだぞ？」

「まあ、持ってみなって」

笑って言うエル

「よっこら・・・うお！？軽ッ！？」

驚きを隠せないバクフーン

そして、バクフーンが休憩室まで連れて行った

21話THE・・・END・・・

ゲストさんが来た(前編) (後書き)

やはり、バトルシーンはあまり書かないのでしんどいです  
うまく書けるといいんですけど・・・

バクフーンさんのポケうまく書けてるかなあ・・・

やはり、心配です

ついでに、ルカの体重は34キロです  
ではっ

また次回〜

ついでに悪役投票は、7月10日位までとさせていただきます  
技の方は明日締め切りとさせていただきます



**ゲストさんが来た（中編）（前書き）**

前回の続きです

一応、エルは剣豪です^^^;

まあ、詳しくは短編の方で！

## ゲストさんが来た(中編)

### 第22話

「さあて、バクフーン君ルカが復活するまで飯でも食つかい？」  
こたつの中で話をする2人

「食つぞ！」

「100人前であつてるかな？」

冗談のつもりで言うエル

「あつてるぞ」

笑つて答えるバクフーン

「そうかそうか」

笑つて答えるエル

＃＄％一方休憩室では＄％＃

「イタタタタ・・・ルカさん凄い力だな・・・」

首をおさえながら言うラグラージ

「でも・・・あいつはあ・・・倒れてんじゃねえか・・・」

同じく首を押さえながら言うクラーケン

「凄い人だなあ・・・」

汗をかきながら言うラグラージ

&％\$一方エル達は・・・＃\$％&

「ぐへえ・・・もう無理だ・・・流石に俺でもな・・・」

満足気な顔のバクフーン

「そうか・・・いやあ、気持ちいい食べっぷりだねえ・・・」

笑つて言うエル

「風呂でも・・・入りたいな・・・」

笑つて言うバクフーン

「そうかい・・・じゃあ、銭湯でも行くか・・・」

少し、準備をして言うエル

「でも・・・少し休ませてくれ・・・」

机でノビるバクフーン

#%\$1時間後#%\$

「ようし！行くか！」

張り切つて言うバクフーン

「ハハハ・・・消化が早いねえ・・・」

少し驚きながら言うエル

「そうか？普通だろう？」

「うちの奴はそんなに早い奴は居なかったね・・・」

苦笑いしながら言うエル

%\$& amp ;家\$%& amp ;

「いや・・・気持ちよかつたねえ」

笑いながらタオルを首にかけて言うエル

「そうだな・・・しかし俺はバトルがしたいな・・・」

笑つて言うバクフーン

「じゃあ、俺が相手をしようか？」

腕を組んで言うエル

「望むところだ！」

勢いを付けて言うバクフーン

「じゃあ、これ」

そう言つてエルはバクフーンの方になにかを投げる

「うおっ！？これって・・・」

驚いて言うバクフーン

「那覇だけど・・・」

笑つて言うエル

「まあいいか・・・」

\$%&道場\$&%

「ようし、行くぞ・・・バクフーン君、言っておくけど手加減は無  
しだよ」

刀を抜いて言うエル

「手加減なんて、こつちがお断りだぜ！」

笑って言うバクフーン

「じゃあ、行くよ」

笑って言うエル

「ぬおっ！？凄い力だなあ・・・あんだ・・・」

刀で攻撃を防ぎながら言うバクフーン

「切れない程度でやっておくよ」

刀をより強く抑えて言うエル

「ちよっ！？・・・この刀・・・モノホン！？」

驚きながら言うバクフーン

「いや、当たっても木刀程度の威力だよ・・・」

「そっか・・・なら、安心・・・じゃねえ！」

焦りながら言うバクフーン

「じゃあ、そろそろこちらも行かして貰うぜ！」

エルの刀を弾き飛ばして言うバクフーン

「これで・・・とどめだ！」

そう言っバクフーンはエルに斬りかかる

「何ッ！？」

驚きを隠せないバクフーン

「バクフーン君、刀が無いからって油断しちゃあ駄目だよ・・・」

笑って真剣白刃取りをするエル

「あんだ・・・一筋縄ではいかないみたいだな・・・」

「そちらこそ」

とても、緊張して言うバクフーンと、楽しんでいる様に言うエル

「じゃあ、ここからが本番だね・・・」

少し緊張して言うエル

「JAPEN流秘伝技・・・刀飛ばし・・・」

そう言っバクフーンの方に刀を投げた

「ぬおっ！？何だこの刀！？」

バクフーンは驚きながら言う

「此処からが本番だよ……白刃鳥……」

エルがそう言った瞬間刀がバクフーンの足の方を狙った

「この……刀、自在に動くのか!?!」

驚きながら言うバクフーン

「じゃあ、最後にしつかり行くよ」

「望むところだ!!!」

勢いをつけて二人は言う

「火炎車アアアアアア!!!!!」

「燕返しイイイ!!!!!」

二人はそう言つて技を繰り出してすれ違った

「俺の負けみたいだね……やるねえ……」

息をきらして言うエル

「あんたもやるねえ……でも、今回は俺の勝ちみたいだな」

笑つて言うバクフーン

「何やつてるんですかあ?」

ルカが道場に入ってきた

「お!俺の対戦相手が来てくれたみたいだな!」

「きゅ……急になんですか……」

驚いて言うルカ

「さて、ルカVSバクフーン面白そうだねえ……」

笑つて言うエル

「ついでだけど、バクフーンはかなり手強い相手だと思つよ……」

息を飲んで言うラグラージ

「じゃあ行くよ……GO!」

#\$%第22話THE……END

ゲストさんが来た（中編）（後書き）

ルカ「何があつてこんな感じになつたんですか・・・」  
ネタが無かつたの^^；期限が長引いたの！  
と言つか何故君が居る！？  
とりあえず、ではっ

## ゲストさんが来た(後編)

### 第23話

「バトルも終盤だなあ・・・」

水を飲みながらエルは言った

「そうだね・・・どっちが勝つかなあ？」  
肘<sup>ひじ</sup>をつきながら言うラグラージ

「宜しく願います」

深い礼をバクフーンにしてルカが言った

「こちらこそ、宜しく」

バクフーンは笑って言った

「じゃあ、行くよ」LeDy GO!」

エルが旗をかざして言った

「そこか！」

先手を取ったバクフーン

「火炎放射！」

バクフーンは火炎放射をルカに当てた

「バクフーンさん、それはホログラムですよ・・・私はこっちです」

そうやってルカはバクフーンの背後に回った

「神速・・・」

そうやってルカはバクフーンの周りをグルグルと回った

「何か、分身が多いみたいだな・・・じゃあ、一気に行かして貰う！」

「火炎車アアアア!!!」

もの凄い勢いで炎を帯びたバクフーンが向かってくる

「バクフーンさん、全部ホログラムですよー」

看板の裏から出てきたルカ

「へっ!?!」

吃驚するバクフーン

「波動弾!悪の波動!」

二つの技を同時に使うルカ

「ぐわっ!?!やるなあ」

少し声をあげるだけで笑うバクフーン

「じゃあ、次はこっちなな・・・噴火アア!!」

物凄い勢いでマグマが出る

「・・・私には、マグマは無理ですね・・・」

少し熱いながらも言うルカ

「地震!」

ルカは地面に向かって思いっきり打撃を食らわせた

「そんな事で揺れないだろ・・・うおっ!?!ぬおっ!?!マジかよ・・・」

「」

バクフーンが喋っている間に地面が揺れ始めた

「面白い相手だねえ・・・あれ?ルカは何処へ行った?」

あたりを見回すバクフーン

「・・・」

無言でバクフーンの頭上からレーザーの様な物を直撃させるルカ

「痛ッ!?!何だこれ!?!あいつは何処へ言った?」

またしても姿を見失うバクフーン

「瑠華流波動術・・・波動光線連射!」

ルカは天井に装置かの様に波動を付けた

「発射!!」

そうルカが言うのと床の前面に波動のレーザーを撒き散らす

「猛攻撃とは・・・ルカはただものじゃないようだ・・・」

真剣な顔付きで言うバクフーン

「プラスチックバーン!破壊光線!!」

その二つが交じり合った光線はルカに直撃した



「・・・」

ルカはその場に倒れた

「ルカ、戦闘不能！バクフィン君の勝ち」  
エルが旗を挙げて言った

「あ、何か勝てた・・・」

啞然とするバクフィン

23話 THE・・・ END

ゲストさんが来た（後編）（後書き）

どうも^^^

まあ、私は戦闘シーンが下手なもんで^^^；

本当にすみません^^^；

期待してた方も申し訳御座いません

## ゲストさんが来た（完結編）

### 第24話

「明日帰っちゃうのか・・・悲しいなあ・・・」

寂しそうに言うエル

「ああ、長居してると迷惑だしな」

腕を組んで言うバクフーン

「長居？なんだそれ？大阪の地名か？」

早々にボケるブラ

「違う！後で意味を話してやるから引っ込んでろ！」

ブラに怒鳴りつけるエル

「はいはい・・・」

渋々上上がるブラ

「いいの？あんな事して」

ブラの方を見て言うラグラージ

「時にはな、厳しくしないと駄目なんだよ。甘やかし過ぎると駄目駄目だからね？」

長々と話すエル

「所で、バクフーン君・・・何でメモしてるのかな？」

微妙に真剣な顔付きで言うエル

「え？・・・いやあ、親友が孤児院やってるからさ・・・エルなら何か言うかな？」と

急いでメモを閉まって言うバクフーン

「優しいんだね・・・バクフーン君って・・・」

少し涙を拭いて言うエル

「まあ、そんな事より夕食　夕食」

張り切って言うバクフーン

「バクフーン！人様の家だよ（汗）」

焦りながら言うラグラージ

「まあまあ、いいのいいの」

中に入って停めるエル

「御免ね・・・エルさん・・・」

少し黙り込んで言うラグラージ

「気にしない、気にしない。」

笑って言うエル「夕食ができるまで、タイタニックでも見ます？」

ゲストの二人に、笑って話しかけるルカ

「お！いいなあ、そうしよう。なあ、ラグラージ」

手を引つ張って言うバクフーン

「痛いよー・・・バクフーン・・・」

泣きながら言うラグラージ

「ハハツ　向こうは盛り上がってるな。俺も張り切るか！」

笑いながらみじん切りをするエル

「痛ッ！？指切っちゃった（汗）」

子供の様に指を咥えながら言うエルであった

\$ # % 3 時間後 \$ # %

「おうし、食事ができたぞ・・・って、うおい！？何で皆そんなに

泣いてんの!？」

吃驚して3人に尋ねるエル

「いやはや・・・タイタニックってあんなに泣けんだな・・・」

バクフーンは声を震わせながら言った

「そうか・・・まあ、できたぞ」

溜息を一つついて言うエル

「いただきます」

バクフーンがいち早く言った

＃＃％１時間後＃＃％

「ごちそうさま・・・もう無理だ・・・」

バクフーンが頂垂れて言った

「ハハ・・・さて、発表がある」

真剣な顔付きで言うエル

「風呂に入る順番だが・・・もう、面倒臭いので二人ずつ入ってくれ。」

「

そのエルの発言に3人はコケた

「コホン・・・一応、組は決めてんだから・・・誰から入ってくれ  
てもいいぞ」

咳き込んで言うエル

「じゃあ、ルカさん僕達から入ろうか・・・」

「そうしましょうか」

笑って答えるルカ

＃＃％浴室＃％&

「ルカさん・・・本当に細いね・・・」

浴槽でノビながら言うラグラージ

「そんな事ないですよ・・・ラグラージさんだって・・・」  
少し照れながら言うルカ

＃＃％３０分後＃＆amp;

「出ましたよー」

タオルで毛を拭きながら言うルカ

「じゃあ、俺達も入るか・・・ねえ、バクフーン君」

笑って言ったエル

＃＃％またまた浴室＃％&

「そういえば、バクフーン君毛並みがいいね」

何かに気がついた様に言うエル

「一応手入れしてるからな・・・」

頭をかきながら言うバクフーン

「そして、やっぱり筋肉質だねえ」  
笑って言うエル

「まあ、毎日バトルだからな（汗）」  
頭をかいて言うバクフーン

「そういやあ、エルも筋肉はあるんじゃないのか？」  
フツと気がついた様に言うバクフーン

「俺は、無いかな．．ルカの方があるし．．」  
そういう会話が続いた．．．

\$%&2時間後#\$%  
「おやすみー」

ゲストの二人は眠りに着いた

「明日かあ．．早いもんだなあ．．ルカ」  
残念そうに言うエル

「そうですね．．．」  
%&\$翌朝#\$%  
「じゃあな」

バクフーンとラグラージはこちらに手を振った  
「またな」

負けじと手を振るエル達

「やっぱり、目に水が．．．帰るか．．」  
「ええ．．．」

#\$%ゲストの二人#\$%  
「いい奴らだったな」

笑ってバクフーンは言った  
24話THE．．END

ゲストさんが来た（完結編）（後書き）

さて、ゲスト編第2弾終わりましたあ  
結構頑張ったのですが、今回もぐだぐだでした^^  
ではっ

浴衣萌え（前書き）

疲れた（汗）

ルカ「やっと更新しましたね（汗）」

ついでに、今から最終話につなげて行くよ！

ルカ&エル&ブラ「な、なんだってー!?!」

ではっ



## 浴衣萌え

### 第25話

「うーん、やっぱりこれが一番お前に似合うかな！」  
ブラが笑ってルカに言った

「ふえっ!? ブ、ブラさん・・・女性用の浴衣は・・・ちょっと・・・」

半泣きになりながらも講義するルカ

「いいんじゃないね？」

何も聞かずに、とりあえずカメラで写真を1枚撮りながらいうブラ  
「ふえっ・・・ううっ・・・」

照れながらも泣くルカ

「そうだ！ 今日、祭りあるらしいから行って来い。浴衣だしな」

「女性用じゃない方を・・・」

「ダメだ」

笑いながらブラは言った

「祭り」

「女性になりきればいいんですよね・・・」

そんな独り言を言いながら、ルカは歩き続けた

「へい！ 彼女！ 俺と、祭りに行かないか？」

「すみません、急いでるんで・・・」

ナンパから早めに切り抜けるルカ

(本当に間違えられてるんですね・・・)

そっ心に思いながら、走って店を回る

「10分後」

「祭りって結構楽しいですね・・・ナンパさえなければ(汗)」

上機嫌だが、ルカがナンパにあったのは6回目。無理も無い

「俺と一緒に行かないか？」

聞いたことのある声だ

「・・・・・・・・リユウ兄さん？」

「え・・・・・・・・新一!？」

リユウだけ、驚く

「お前、どうした？その格好、結構可愛いが・・・・・・・・」  
少し照れながらリユウは言った

「可愛いんですか？いや、祭りに行っただけです」

「何かの縁だ。俺もついていこう・・・・・・・・」

〈町〉

「あ・・・・・・・・リユウ兄さん・・・・・・・・」

「どした？」

「手をつなぐのは、やめませんか？男同士ですし」

此処まで、リユウの希望により手をつないで此処まで来ているのだ

「いいじゃないか」

「でも、もう帰りますので・・・・・・・・」

時計を見て、ルカは帰ろうとした

「待てよ・・・・・・・・」

「な、なんですか!？」

〈此処からは面白いのですがBLなので、NG〉

「ルカの奴遅いな・・・・・・・・」

「ただいまですー・・・・・・・・」

へ口へ口のルカが帰ってきた

「・・・・・・・・悪かった、御免・・・・・・・・」

下を向きながら、ブラがルカに謝った

「あ、いいですよ・・・・・・・・」

「もう・・・・・・・・寝ようか・・・・・・・・」

そして、ルカがおやすみと言う時だった

「・・・・・・・・ッ!！」

胸を強く押さえつけて、ルカが倒れた

「おい!大丈夫か？」

ブラが必死に横で言う

「エル！エル・・・？」

そこで、ブラは驚きの光景を目にしてしまった・・・

エルも倒れていたようだ・・・

幸い、今回死んでは無かった様だ・・・

25話 THE END

浴衣萌え（後書き）

gggggg

ルカ「がんばって下さい」

君は私を悩殺するつもり？

ルカ「何故ですか？」

浴衣だし・・・

ルカ「・・・・・・・・」

覚めない悪夢（前編）（前書き）

にゅー……。最終話まで後2話っ！

エル「おおー……。。」

ぬ？どうした？

エル「いやー……。何も……。。」

どした？

エル「出かけてくる……。。」

いってらっしやーい（汗）

今回は、プラ目線です。

覚めない悪夢（前編）

「むう・・・クリアできないなー・・・。」

俺は、いつもと同じ様に、部屋で、ルカとゲームをしていた・・・。

「ブラさん、そこを右に曲がって下さい。」

そうルカは、俺に言うてくれた・・・。

「どうか？」

ルカの冷静な指示に従って、俺は、コントローラーの左スティックを動かした・・・。

そうすると、確かに、俺の見た事ない場所・・・。流石、ルカだ・・・。

「次は、どうするんだ？」

俺は、テレビの画面を見ながら、ルカに尋ねた。しかし、ルカから、返事が返ってこない・・・。

「ルカ・・・？」

俺は、驚いて後ろに振り向いた。

そこには、ゲームよりも驚く光景が・・・。

まただ……。また、ルカが倒れている……。

「エル！」

俺は、大声でエルを呼んだ……。

しかし、エルは出掛けている事をふと、俺は思い出したのだ……。となると、俺は一人というわけだ……。

この近くに、病院はあるが、歩いて10分はかかる……。救急車を呼ぼう……。

（ + \* 15分後 ） + P \*

「えっと、倒れた原因が分かりました……。」

「何ですか……？」

俺は、恐る恐る医師に聞いた……。

その医師は、長年この病院に勤めている医師らしい……。

今は、その医師の言葉を信用するしかない……。

「DEATH shut・terです……。」

医師は、辛そうに俺に伝えた……。

説明しよう、DEATH shut・terとは心臓に急に激痛が走り、倒れるのが最初の症状の病気。

かかった者は、その日の夜がやまと言う……。なんとも、恐ろしい病気である。

倒れた後は、そのまま呼吸困難が続くと言われている……。かかる確率は相当、低い病気である。

「……………」

俺は、黙り込んでしまった……。泣きそうになった……。友達……。いや、親友がそんな難病にかかったからだ……。

「今夜がやまだと、思われます……。」

医師は、俺にそう伝えた……。

「今、会う事は……できるんですか？」

俺は医師に、そう聞いた。

「一応……。」

その言葉を聞いて、ルカの病室へ急いで行った……。

（病室）

そこには、ルカが目を閉じて、開ける様子など一つも無かった……。エルの馬鹿……。何で、こんな時に居ないんだ……。もう、夕方か……。ルカの命も永くないのかな……。そう思うと、涙が……。涙が止まらない……。病弱なのは、知っていた……。でも、こんな事になるとは思っ  
てなかつた……。

「ブ……。ラ……。さん……。」

誰かが、俺を呼ぶ声が聞こえた……。



言い方からすると・・・、ルカ!?

俺は、急いでルカのベッドにかけよった・・・。

「ルカ!大丈夫なのか?ルカっ!!」

俺は、分かっている事を質問した・・・。

大丈夫・・・?そんな分けないじゃないか・・・。

「私は・・・もう・・・だ・・・め・・・です・・・。」

とぎれとぎれで、小声だけど俺には聞こえる・・・。

これが、ルカの最後の言葉になると言っても、過言ではない・・・。

「何か頼みごととかはあるか!?俺に出来る事なら、するぞ!」

俺は、必死でルカにそう伝えた・・・。

死にかけなのに、俺に出来ることなんて無いのに・・・、と思いつながら・・・。

「私が・・・死・・・ぬまでは・・・側に・・・居て・・・下さい・・・。」

これが、ルカの最後の頼みだと俺は思った。

ルカはあまり、人に頼みごとはしないからだ・・・。

だから、俺はそう思った・・・。

「分かったよ。」

俺は、笑ってルカに言った・・・。

泣いてなんか、言えないし・・・。

もう、夜の7時か……。

「あ……り……がと……。」

そう言つて、ルカの心臓が突然止まってしまった……。  
病状が悪化したのだろうか……。  
俺は、すぐに医師を呼んだ……。

「もう……眠りに……。」

医師は、俺にそう伝えた……。  
反論したかった……。でも、できなかった……。  
その通りだから……。

「手術はできないんですかっ!？」

俺は、医師に大声で言った。

何故だろう……。反論する気は無かったのに……。

「分かりました……。できる限りの事はしましょう……。」  
「有難う御座います!」

俺は、頭を下げた……。

そして、ルカの言葉が頭をぐるっと回った……。  
死ぬまで側に……。まだ、ルカは……。生きてるっ!

「手術中、手術室に居てもいいですか？」

「いいですけど……。珍しいですね……。」

良かった……。医師がOKしてくれて、良かった……。

ルカとの約束は、守れたな・・・。

（4時間後）

「残念ですが・・・。」

医師の言葉に、俺は・・・泣いてしまった・・・。  
ご・・・ごめん・・・、ルカっ・・・。  
俺は、泣いちゃった・・・。

「ルカに会わせていただけですか・・・？」  
「どうぞ・・・。」

医師はルカに会わせてくれた。  
やっぱりルカは、眠っていた・・・。  
永遠の眠りについてた・・・。

「ごめんよ・・・ルカ！」

俺は、ルカの手を握って泣いていた。  
手に力を込めて・・・。

「さ・・・よう・・・なら・・・楽しかった・・・で・・・す・・・  
よ・・・。」

そう、俺の耳には聞こえた。  
ルカが言ったのだろう・・・。  
ルカの手が俺の頭を、撫でてくれた・・・。

「ルカアアアアア!!!」

俺は、そう叫んだ……。  
涙が、ポロポロとルカの遺体に落ちた……。  
でも、もうルカの体が動く事は無かった……。  
今まで、有難う……。  
その他の気持ちで頭がいっぱいだった……。

「ルカ……。本当に有難う……。」

俺は、情けない顔だけど精一杯笑った……。  
有難う、ルカ……。  
そして、さようなら……。

「じゃあな……。」

俺は、そう言ってルカの病室を後にした……。  
本当に、ありがとう……。  
しかし、俺の悪夢は此処からなんて、予想もしなかった……。

T H E . . . E N D

覚めない悪夢（前編）（後書き）

ふう……書けた……。

エル「……良かったな……」

どうしたの？

エル「うん……以外な展開だな……」

そうだけど……読者さんはいないかな……。

エル「うん……」

元気ないなあ……。。

覚めない悪夢（後編）（前書き）

ユキ「皆・・・元気がないね・・・。」

・・・orz

ユキ「どうした・・・の？」

いやー・・・何でも・・・。

覚めない悪夢（後編）

「エル、今日の飯は何だ？」

俺は、いつもと同じ様にエルに尋ねた。  
最近、エルが少し変な気がする……。

「今日は……考えておくよ……。」

エル、何故そんなに元気が無いんだ？

俺はエルが、心配になった……。  
でも、此処からが……本当の、悪夢だったなんて……。  
この時の俺には、何も分からなかった……。

「なあ、エルどうしたんだ？」

俺は、エルに軽く尋ねた……。  
でも、エルからは驚きの答えが返ってきた……。  
その言葉には、俺もショックだった……。

「俺……余命が、今日1日なんだ……。」

凄く辛そうな顔をして、俺に伝えてくれた……。  
俺は、一瞬にして言葉を失った……。

「今まで、黙っててごめんな……。」

エルは、本当に辛かったのだろう……。俺の、脳裏を色んな言葉が過ぎ去った。なんで気づいてあげられなかったんだろう……。もっと、早く気づいていれば……。

「だから、いつどうなってもおかしくないんだ……。」

エル……。

俺は、エルがどうなってもおかしくない……。その言葉を、脳に叩き込んだ。

「……ッ……。」

エルは、痛みからだろう。自分の胸を押さえたもう……。永くないかな……。

「大丈夫か!？」

「むぐっ!?!がはっ!?!」

咳き込んだりしている。

やはり、病院に連れて行こう。

そう思い、俺はエルを背負って病院に走った。

〈病院〉

「エルさんは……。後一時間は息をしてと……。」

医者はつらそうに、俺に言った。

俺だって、信じたくも聞きたくもない事実。



だが、聞いておこう……。  
ああ……。胸が苦しくなる……。

「会いにいつても、宜しいですか？」

「かまいませんよ……。」

（病室）

エルは、苦しそうな表情を浮かべていた。

俺は……。少し泣きそうな顔をして見ていたのだと思う。  
目がかゆかった……。

「エル……。」

俺は、エルの手を掴んで泣き崩れた。

今までに、無い位……。

余命をしまったのに……。

あんなに、笑っていてくれてたんだな……。

俺の涙で、エルの布団はぐちゃぐちゃだ……。

「ブ……。……。ラ……。……。」

少しだけだが、小声で俺の名前を呼んでくれた……。

「あ……。りが……。と……。う……。……。」

そう言っつて、今エルが出せる精一杯の力で抱いてくれた。

「エルッ！……！」

そう言つて、俺はエルを力強く抱いた……。  
エルの力は、もう……。無くなつてきた……。  
それでも抱き続けた。  
もう、一生会えないんだから……。

「今まで、居てくれて……。ありがと……。出会つた事に……。  
ありがとう……。」

「もしかすると……。俺とブラとルカが会うのは、必然だったの  
かもな……。」

必然……。

そうかも、しれない……。

「友人が死ぬ時位……。涙を見せるなよ……。」

エルの手が、俺の目の涙を拭いてくれた……。

「笑つて……。居てくれ……。いつまでもな……。」

俺は、精一杯笑つた。

泣くのをこらえて……。

「また……。会えたらいいな……。楽しみに……。してる……。  
よ……。」

エルは、最後の力を振り絞つて俺に笑つた……。  
その後、エルの力が抜けてベットに倒れこんだ……。  
綺麗な笑顔で……。

「エル……。俺は、泣かない……。からな……。」

エルに、言った……。  
無駄かも、しれないけど……。  
笑って……。

「そうだよ……。泣かないで……。居るんだぞ……。」

俺は、エルの声が聞こえた気がした……。  
でも現実には、もう居ない……。  
その時だった……。  
俺の頭を、エルは撫でてくれていた……。  
でも、すぐにパタリと手は落ちた……。

「ありがとーな。」

俺は、笑って病室を後にした……。  
精一杯涙をこらえて……。

「ばかやるー……。笑えるかよ……。」  
(本当に、それでいいんですか?)

声が聞こえた……。  
ルカの声だ……。

(エルさんとの、約束……。守りましょうよ……。)  
「分かった……。」  
(それでこそ、ブラさんです。)

俺は、目の前でルカが笑っている様な気がした。  
幻覚かな?

俺は・・・、そうじゃない気がした・・・。  
ルカが居ると・・・。

「・・・帰るか・・・。」

この時、俺は・・・ある決心をした・・・。

T H E . . . E N D . . .

覚めない悪夢（後編）（後書き）

・・・というわけです・・・。

ユキ「ぐすっ・・・ひぐっ・・・。」

わわわああ!!「ごめん!!」

ユキ「どうするの・・・黒いおにーちゃん・・・。」

それは、次回・・・。

次回が・・・最終話・・・です・・・。

ユキ「そうなんだ・・・ひぐっ・・・。」

笑顔で・・・。

ユキ&駄目作者 無限「さよーなら!」

覚めない悪夢（完結編）（前書き）

ついに、最終回！

ユキ「どんな展開を……。」

それでは、どござ……。

覚めない悪夢（完結編）

俺は、ある決心をした。

それは、とても危険な事である。

ユキは、気持ちよさそうに寝ている・・・今は、朝3時だからな・・・。

俺は・・・、そう。

ビルの屋上に来た。

でも、何故か気配を感じる・・・。

誰だろう・・・。

後ろには、フィが居た・・・。

「やめて！ブラっ！」

そう俺に、叫んで言った。

もう、無駄なのに・・・。

でも、何故この計画を知っているのだろう・・・。

「僕が、こんな事も知らないと思うのかい？ブラ君・・・。」

ラテイさんか・・・。

あの人、人の心が読めるんだっけ？

悔れない・・・。

「うるさいっ！俺はやると、言ったらやるんだっ！」

俺は、歯を食いしばってそういった……。でも、本当にできるのかと不安になってきた……。

「でも、それだとエル君とルカ君は悲しむんじゃないかと……、僕は思うよ。」

「本当だよっ!」

その言葉は、俺の心にグサリと突き刺さった。

「う、うるさいっ!」

俺は、少し泣きながら言った。

「ごめん、皆……。」

でも、俺はやるよ……。

「ごめん……。本当に……、ごめん。」

「ブラ……やめてよ……。」

そう言って、フィは俺に抱きついてきた。

「はなせっ!」

俺はそう言って、フィを振り払った。

「ごめん……でもっ!」

「何でそんな事するのっ!」

「俺なんて、もう生きる目的なんてないっ!」



そう言っつて、俺はもう飛び降りようとした。

「今から、俺は飛び降りるっ！」

そう言っつて、俺は飛び降りようとした。  
その時だった……。

「あなたが死ぬなら、私もっ……。」

そう言っつて、俺が下になってしまったが抱きついてきたっ。  
それで、もう落下してしまった。

「お前はまだ、生きれるっ！」

そう言っつて俺は、最後の力でフィを屋上に投げた。  
何とかフィは着地したようだ。

「じゃあな……。」

「ブラアアアア!!!!!!」

俺は、そう言っつて手を振っつて微笑んだ。  
フィの声がよく聞こえた。

そして、フィの涙が俺の体にポツンと、一滴落ちた。

(もう生きる目的なんかないっ……。)

俺は、目を瞑りながらそう思った。

本当に、これでよかったのかな……。

今は思い出が駆け巡っている。

あの二人が居た時、楽しかったな……。

「本当に、今まで楽しかったよ……。有難う……。」

そう小声で言っつて、俺は涙を流した。

さようなら……。

さよう……。な……。ら……。

B A D E N

「ぬおっ!?!」

ちよつと、君っ!?!

「夢……。だ……。死んでない……。」

「ブラー、早く起きろー!」

下から、声が聞こえた。

エルの声だ……。

俺は、泣きそうになった。

当たり前のことなのに……。

「やっと、降りてきた……。」

「遅いですよっ!ブラさんっ!」

何故だろう……。涙が出てきた……。

「ブラあ!ルカあ!」

そう言って、俺は泣きながら二人を抱きしめた。

「ちよっ、苦しっ……。」

「苦しい……ですっ……。」

そっいいながらも、二人も強くだきしめてくれた。  
その後、気づいた……。

二人も、涙を流していたことを……。

当たり前前が一番幸せ……。

大切な人がいるから、生きがいがある……。

君が居てくれて、有難う……。

君が俺を見つけてくれた事に、ありがとう……。

生まれてきてくれて、ありがとう……。

本当に、ありがとう……。

ありがとう、ありがとう……。

HAPPY END……

覚めない悪夢（完結編）（後書き）

この小説を見ていただいて、有難う御座いましたっ  
これからも、頑張っていきたいので、宜しくです。  
最終話まで見ていただいて、有難う御座いました・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4562d/>

---

光と闇の恋

2010年10月11日18時06分発行